

とちぎ協働デザインリーグは、  
協働のまちづくりの調査研究、  
支援・協力、政策提言等を行う  
シンクタンクです

2015.1  
リーグファイル 17

〒320-0032 宇都宮市昭和 2-2-7  
とちぎボランティアNPOセンター内  
URL: <http://www.tochigi-tcdl.net>

とちぎ協働デザインリーグ  
TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE

3つの「きょうどう」  
～意義と課題～

## 大石 剛史

とちぎ協働デザインリーグ 理事  
国際医療福祉大学 准教授

「きょうどう」の営みに関わる中で、様々な人から「きょうどう」とは何か？と尋ねられることが多い。代表的な「きょうどう」に「共同」、「協同」、「協働」があるが、私自身は「共同」は「資源や場を共有することを基盤とした助け合いの仕組み」、「協同」は「共通の課題や関心を持つ人の間の助け合いの仕組み」、そして「協働」は、「多様な主体が、地域や社会の課題を共有することでつながり、課題の解決を共に図っていく助け合いの仕組み」と捉えている。「共同」はコミュニティ、「協同」はコーポレーション、「協働」はコラボレーションと訳している。自治会などの地縁組織は「共同」の仕組みで動いており、生協などの会員組織やボランティア団体、NPOなどは「協同」の仕組みで動いている。そして「協働」は、多様な主体が特定の課題によって結び付けられているネットワークのようなものとして捉えられる。「共同」はプラットフォーム(場)を共有している「面」のイメージ、「協同」は特定の関心を一つに絞っている「点」のイメージ、「協働」は課題に対し、多様な主体が繋がりを作ってい

る「線」のイメージである。

さて、この3つの「きょうどう」には、それぞれ利点と欠点がある。

「共同」の利点は地域の身近な「場」を共有することを通して、濃密かつ近接的に様々な助け合いが可能な点である。しかし、その濃密性と近接性は欠点でもあり、「場」の共有を望まない人にとっては、そのような助け合いは「わずらわしいもの」になる。近年自治会の加入率の低下や、自治会からの脱退が問題視されているが、「共同」は強力な助け合いの基盤になる反面、それを維持することは、現代の日本の地域社会において難しい課題となっている。

「協同」の利点は、「共同」のように「場」に縛られず、自分の関心や興味にしたがって、自由に助け合いの関係を作れるところである。共通の関心事でつながるので、内部の関係性も良好になりやすい。しかし、助け合いの関係を自分で作れる人は良いが、そうでない人は取り残され、助け合いの関係から漏れてしまう可能性がある。また関心事を共有しない者同士はつながりを作りにくい。

「協働」の利点は、地域の課題を解決することを目的に、多様な主体による繋がりを作れることにある。「共同」のつながりは、地域に限定され、「協同」のつながりは関心に限定されるが、「協働」においては課題さえ共有できれば、様々な主体の連携が可能である。しかし、行政や企業、NPO、地縁組織など、あり方の異なる多様な主体の連携を図ることそのものに難しさがともない、そのことが「協働」の最大の課題と言える。

このように、3つの「きょうどう」にはそれぞれ利点と欠点がある。これからの地域社会の助け合いの仕組みを作るには、この3つの「きょうどう」の利点は活かしつつ、欠点とされる部分については、実践の中で粘り強く克服する努力を重ねていくことが重要であろう。

「共同」においては、近接性という利点を活かしながら、多様な価値観を地域の中で受け入れる努力が重要である。「協同」においては、それぞれの団体の得意分野を活かしつつ、異なる関心事を持つ団体と、まさに「協働」で繋がるのが求められる。多様な価値観を受け入れる努力と、課題解決のためのつながり作りを厭わない実践の先に、最後の「協働」による助け合いの仕組みが見えてくるのではないだろうか。

## 開かれたコミュニティへ

小針 協子 / とちぎ協働デザインリーグ 主任研究員

### ■ 「開く」ことで起きる新しい動き

平成 26 年 10 月現在の栃木県の年齢別人口構成比をみると、15～64 歳の生産年齢人口は、61.8%（前年 62.6%）、15 歳未満の年少人口は 13.1%（前年 13.2%）で、毎年、減少してきている。一方、65 歳以上の割合（高齢化率）が、調査以来最高の 25.1%（前年 24.2%）となった。

市町ごとに人口構成比にばらつきがあり、高齢化プラス過疎化が深刻な地域もある。生産年齢人口が仕事を求めて流出すれば、残された高齢者で、地域を支えることは難しい。

しかし、地域の現状を住民自らが認識し互いに共有することで、地域づくりを核とした人と人との関係が深まり、それが地域内外に開かれることで、徐々にではあるが①交流人口が増加し、戻ってくる若者や外からの移住者が見られる。②地域の高齢者が、楽しみながら地域貢献していける。③地域課題の解決に向けて、細やかな合意形成が展開された等の動きが起きている。「開かれたコミュニティ」という観点から県内の動きをみてみよう。

### ■ 那珂川町：小砂地区コミュニティの挑戦

#### 「日本で最も美しい村」認定

NPO 法人「日本で最も美しい村連合」の課題意識は、時代の流れの中で、小さくても素晴らしい地域資源や景観をもつ村の存続が難しくなってきたことにある。「フランスの最も美しい村」運動にならぬ、失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す運動を平成 17 年 10 月にスタートさせた。

平成 25 年 6 月、那珂川町小砂地区では、「日本で最も美しい村」の資格委員会現地調査が実施された。

小砂地区は、①人口が概ね 1 万人以下であること。②地域資源が 2 つ以上あること。③地域資源を活かす活動があること。という 3 つの条件をクリアし、平成 25 年 10 月に「美しい村」連合への加盟が認定された（栃木県で最初）。この取組みは、日本の美しい小さな村が自分たちのチカラで存続していくこと（自立）を目指すため、認定後も 5 年

ごとに再審査がある。今後ますます、住民が自らの価値に誇りをもって、暮らしや資源を外に開く努力が問われる。小砂地区の「美しい村」存続への挑戦が動き出した。



小砂地区：電線の無い田園風景



小砂地区：里山の芸術の森

平成 26 年 4 月から那珂川町に住んでいる「地域おこし協力隊」稲垣さん（埼玉県所沢市出身）の発案で、11 月 16 日「広重紅葉まつり」に、農産物等のアンテナショップ「小砂 お母ちゃん cafe」が出店された。新米の焼きおにぎりのほか、地域のお母ちゃんたちの手づくり料理で地産地消をアピールし、その後も地域の各イベントに出店していくとのこと。これは、地区外から入ってきた若者と地域の熟年世代（お母ちゃんたち）との協働による地域おこしであり、また、地域を内外に発信する実践である。

他にも、小砂地区の美しい地域資源を活用し、棚田のオーナー制度を設け、棚田活用に絡めて農家民泊を実施している。また、ウォークラリーや体験イベント等の取組みもさらに充実させていく方向でいる。今年度の活動のふりかえりとして、地区住民との連携を充実させ、地域全体の盛り上がりとしていきたいという意見があがっている。

## ■ 宇都宮市：清原地域振興協議会 地域資源の活用プラス新しいチャレンジ

清原地域振興協議会は、市の中心から遠く離れ、高根沢町、芳賀町、真岡市に隣接している。南北 12 km に渡る細長い地に、広大な敷地をもつ工業団地を抱え、地区ごとに様々な地域資源がある。

特に板戸町には、200 年ほど前に造られた美しい天棚が住民の手で保存され、祭りに活かされている。



板戸地区：天棚

鬼怒川の水は、美味しい米を育てる。畑も多く、「清原ブランドの農」は、若手農業士を中心に将来に向けての価値ある取組みを生み出している。地域にある福祉施設と梨農家との協働が見られ、ユニバーサル農業としての広がりも期待できる。



果樹園の梨

内陸型工業団地として日本最大級の面積を有する清原工業団地は、昭和 52 年に第 1 号企業が立地して以来、高度技術に立脚した企業の誘致が図られているのが特徴である。工業団地勤務者の中には、この地域に移り住む人もいて、古くからの住民と外から来た人との交流を図ることが、大きな課題となったため、それらを融合しより良い地域にしようと清原地域振興協議会（通称：清振協）が昭和 59 年に生まれた。清振協は発足以来、内側にコミュニティを開き新旧住民の交流に努めてきた。今日では、この地で共に老いてきたことでの課題にも向きあっている。

古い住宅団地（光が丘団地）での新しい動きとして、団地の一角に古くからある酒店を若者らしい感性で改装した「サカヤカフェ マルヨシ」がある。ここを起点として、地区外の若者がベーグル店やお好み焼き屋を出店している。いずれも古い家屋を利用して、温かみのある雰囲気醸し出しつつ、地域に新しい風を運んでいる。これらの店を目当てに遠くから訪れる若者もいる。マルヨシで供されるランチや販売品のなかには、清原地域の農産物を活用したのももあり、商品開発には梨農家（山口果樹園）も関わって、清原での地産地消を目指している。

清原地域から外へ出向いていく試みとしては、宇都宮市中心部で開催される「サードテナイトフィーバー」や「表参道マルシェ」へ、サカヤカフェマルヨシと山口果樹園が協働で商品開発した梨のピクルス等を出品している。

外から工業団地に勤務する人たちやスポーツ観戦で訪れる人たちと地域住民との交流といった観点では、外から来た人たちが、板戸地区の天棚に代表されるような地域資源をどれだけ知っているか・訪れているか。同じく、県外から多くの農業者が訪れる山口果樹園をどれだけ知って、そこで開発される清原地域の食品をどれだけ口にして、購入しているだろうか。仕事帰り・スポーツ観戦帰り等に地域の人と交流しながら新鮮な農産物を購入し、調理法について語り合うなどの日常的な地域内外の交流も望まれる。

## ■ 「開く」とは

「開く」は「つながる」とも置き換えられる。地域特性が違って、「開く」の基盤には様々な形の「人と人とのつながり」が見られた。

小砂地区の活動から、人が減り、経済活動が縮小しても、地域が消えてしまうことはなく、逆に、小さいからこそその「人と人との関係」がある。地域住民もまた、外とのつながりと同時に内側のつながりを大切に、さらに広げ深めていこうとしている。

清原地域のように大きな組織が、課題意識をもってコミュニティを内側に開いたことは意義深く、地域が活力を増していった。さらに外と内をつなぐ交流において、様々な地域資源の活用が考えられる。ここにも「人と人との関係性」がみてとれる。

## 【 書 評 】 生き心地の良い町



岡 檀 著 / 講談社 / 2013年7月  
評者：館野 治信（上三川町監査委員）

### 【目次】

- 第1章 事のはじまり ー海部町にたどり着くまで
- 第2章 町で見つけた五つの自殺予防因子  
ー現地調査と分析を重ねて
- 第3章 生き心地良さを求めたらこんな町になった  
ー無理なく長続きさせる秘訣とは
- 第4章 虫の眼から鳥の眼へ  
ー全国を俯瞰し、海部町に戻る
- 第5章 明日から何ができるか  
ー対策に活かすために

B6判・200ページ強の小振りな本書は、地域特性と自殺率の関係を取り扱っている。著者は健康管理の研究者であり、本書は大学院での研究成果を平易に記述したものである。学術書ではないが、地域コミュニティについて、興味深い知見が示されている。

多くの場合、自殺率に関する考究はその原因である健康問題、経済問題、社会とのつながりの問題などの自殺を引き起こす危険因子に関するものである。著者は自殺を予防する因子に着目し、地域特性との関係を調査・検討し、5つの自殺を緩和する因子を見出している。さらに、そのような因子を育ててきた地域の特性形成の土壌についても検討し、貴重な結論を導いている。

全5章構成で、第一章「事のはじまり」で、課題の設定と、研究の対象フィールドとなった徳島県の小さな町にたどりつく過程が述べられる。

第二章「町で見つけた五つの自殺予防因子」で、自殺を予防していると推測される地域コミュニティ特性の調査結果を述べている。その一つ「コミュニティのゆるやかな紐帯」は人と人のつながり（絆）が強い方がベターという通説を覆し、「つきあいはあいさつ程度」というゆるい結びつきが自殺予防に寄与していると指摘している。また、多様性が尊重される地域特性や、しばりの少ない地域内組織の存在が自殺予防に貢献していることを、調査結果を踏まえて示している。さらには、「病は市に出せ」の地域住民の特性も納得の指摘である。困りごとや悩みを公開し、助け

を求めよとの意識である。

第三章「生き心地良さを求めたらこんな町になった」では、地域の実態の一端を紹介している。異質な存在の排除ではなく、多様な人がいた方が良いとする気質、監視ではなく関心、人物本位主義などの町民意識が紹介されている。

第四章「虫の眼から鳥の眼へ」では、自殺率と地形の関係を全国的に比較・検討し、山間部より海岸部で、また人口密度の高い地域で自殺率が少ないことなどの興味深い結果が示されている。

第五章「明日から何ができるか」では、自殺予防因子の研究成果を踏まえて、自殺予防につながる地域作りの提言をしている。「幸せでなくてもいい」など、既成概念に捉われない新鮮な発想が展開されている。

本書は自殺率と地域コミュニティの特性の関係を考察もしたものであるが、さらには、そのような地域コミュニティの特性がなぜ、あるいはどのように形成されたのかについて検討している点も本書の読みどころである。地域作りや、地域内の人のつながり、そして個人の生き方を考える上で有意義な示唆を与えてくれる一書である。

カワチ・イチローなどにより、ソーシャル・キャピタルと健康の関係が論じられるなど、地域の絆の多様な意義が報告されているが、本書は地域コミュニティやソーシャル・キャピタルの研究分野に新たな成果をもたらしたと言えよう。